

ご発表者 大阪府立島本高等学校 鈴木寿先生

記録 大阪府立農芸高等学校 河田良子

第二分科会では、夏目漱石の「こゝろ」の第一時、第二時を題材に、「小説の授業の方法」をご教授いただいた。

鈴木先生はまず、小説の基本的なとらえ方として、「小説に書かれていることは、小説の中の『真実』だ」「小説は読者が完成させるから面白い」と生徒に語りかける。また、同時に「作者は語り手ではない」、「小説中の人物像は現実と同じように多面的である」、「心情は常に変容し、小説中の場面に〈きっかけ・出来事〉→〈心情〉→〈言動〉という形で現れる」という読解の前提を提示することで学習の到達点がどこにあるのかをつかませる。つまり、鈴木先生の授業を受ける生徒は、本文の学習に先だって「小説は面白い」「小説の学習では具体的に○○という力がつく」というプラスの先入観をもつことができるのだ。

さらに鈴木先生は、「小説だからこそつけられる読みの力」を授業者が発見するために、『『読み』と『発問』のための指標78』をお示しくださった。これは、例えば「作者は？」「語り手は？」「語り手の視点は？」「作品の舞台となる時代は？」「その時代の文化は？」などという、作品分析のための視点の一覧表で、鈴木先生の言葉をお借りすれば、「鉱物の分析をするように、共通の指標を用いて作品を分析することで、作品の特徴を浮かび上がらせる」ためのものだ。この「指標」を用いれば、授業者はそれぞれの特徴を踏まえたうえで授業づくりができる。(例えば「この作品は特に『擬声語・擬態語』が豊かなので表現活動に繋げたい」「この作品の主人公は『時代の常識』と対峙したもののそこから抜け切れてないという特徴をもつため、読解には時代背景の理解が欠かせない」など)。

また、自分もそうなのだが、授業で小説を扱う際に、「どこまで読めば『読んだ』ことになるのか」という不安を抱きながら教材研究をしている若手の先生は、決して少なくないと思う。そんなとき、鈴木先生のこの「指標」を、教材研究の最低ラインだと設定することで、自信をもって生徒の前に立つことができるのではないか。

鈴木先生は、この「アセンブリー2013」閉幕後、「このような場でいつも自分は、参加者の先生に必ず何か『おみやげ』をもって帰ってほしいと考えている」とおっしゃっていた。今回の「指標」はまさに、鈴木先生から我々参加者への、大きな大きな「おみやげ」だったと確信している。

小中学校と異なり、高等学校にはそれぞれの学校に特色がある。生徒につけたい力や、現場で要求される授業技術は決して同じではない。しかし、ひとつの作品を授業で扱うとき、「授業者がどこまでこの作品と向き合うべきか」に差があってはいけないと思う。自分にとって、この「アセンブリー」は、いろいろな先生方がどのように教材と向き合い、どのように授業づくりをされているのかを知ることができる、たいへん貴重な機会だった。ぜひ2学期からの実践に活かしたいと考えている。

最後になりましたが、小山先生をはじめとする「アセンブリー」運営の先生方、パネリストの先生方、ご報告者の先生方、本当にお疲れさまでした。貴重な機会をありがとうございました。